

「体育嫌い」の社会学：体育嫌いの何が問題とされているのか

日時：2026年6月28日（日）13:45～16:15

会場：早稲田大学東伏見キャンパス 79号館 2階 205号室

【シンポジスト】

坂本 拓弥（筑波大学）

井谷 聡子（関西大学）

原 祐一（岡山大学）

【指定討論者】 宮本 幸子（笹川スポーツ財団）

【司会】 中山 健二郎（東海大学）

◆開催趣旨

現行学習指導要領において学校体育は、運動やスポーツとの多様な関わりを重視し、年齢や性別、障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有できるよう、指導内容の充実を図ることが求められてきた。すなわち、体育・スポーツを特定の能力や資質をもつ者だけが親しむものとせず、多様な関わり方や楽しみ方を保障する方向性が明確に示されている。一方で、月刊専門誌「体育科教育」2019年3月号に掲載された「僕は体育の授業が大嫌いです。体育の教師も大嫌いです」という一文で始まるヒャダイン氏のエッセーが、2024年末に再びSNS上で話題となった。この反響は、体育・スポーツに親しむ態度を育てることを志向する体育科教育の方針と当事者の経験や語りとのあいだに、依然として看過できないズレが存在していることを浮き彫りにしたと言える。しかしながら、体育が嫌いな児童・生徒の存在を課題として捉え、その克服を目指す研究や実践は、これまでも数多く蓄積されてきたはずである。それにもかかわらず、なぜ今、再び体育嫌いが大きな社会的関心を集めるに至ったのだろうか。あるいは、そもそも「体育嫌い」を問題として捉え、克服すべき対象とみなすこと自体に、検討すべき前提や価値判断は含まれていないだろうか。

本シンポジウムでは、こうした問いに迫るため、「体育嫌い」の何が、誰にとって、どのような意味で問題とされているのかについて、各登壇者の報告を手がかりに議論を深めるとともに、問題設定そのものを一度立ち止まって捉え直すことを目的とする。

「体育嫌い」の何が問題なのか：あるいは、体育という教科の自信について

坂本 拓弥（筑波大学）

本発表の目的は、「体育嫌い」という語を巡って、我々がそれを用いることによって生じる問題を明示することである。この試みは、「体育嫌い」についてはもちろん、体育や保健体育（以下、体育）という教科の在り方についての認識を捉え直すことにもなるであろう。

周知のように、「体育嫌い」と呼ばれる対象は多様な内実を有している。本発表では、それらを確認しつつ、むしろその現象を問題としている状況自体を問題化してみたい。例えば、体育を含む学校教育において、何か特定の対象が好きか嫌いかという基準は、果たしてどこまで重視すべきものなのだろうか。また、そもそも体育においてなぜこの基準が問題になるのだろうか。我々は様々な場や状況において、それを幼稚な審級と見なしてきたのではないだろうか。

「体育嫌い」という語を巡る以上のような問いは、最終的に、体育という教科が一体何を目指しているのかという、根本的な問いを提示する。それは例えば、我々が児童生徒にスポーツという文化を、「好きか嫌いかを問わず」教える、あるいは伝えることができるのかという困難な問いである。そこで同時に問われているのは、体育という教科の自信なのではないだろうか。

体育における「学びの共同体」とは ～ベル・フックスのフェミニスト・ペダゴジーから考える「体育嫌い」という現象～

井谷 聡子（関西大学）

運動の苦手な子どもが運動有能感を高めるには、教師や仲間から受け入れられていると感じられる「受容感」の向上が重要であることが指摘されている（例. 堀田 2023）。では、体育の場で「ここにいてよい」と感受できる環境やその条件とは何か。私たちの研究チームは、体育において前提化されるジェンダー規範や性別二元論が、教師—生徒、生徒相互の関係性のみならず、施設的设计や利用のあり方にも浸透し、学習者の参与可能性それ自体を規定していることを明らかにしてきた。そこでは、「体育嫌い」は必ずしも「運動嫌い」を意味せず、規範からの逸脱とみなされることが、成績のみならず共同体内での評価や居場所感を損ない、ときに授業開始以前から特定の学習者を疎外する契機ともなる。とりわけ、誰が学びの成員として承認され、誰が周縁化されるのかという権力作用に着目する必要がある。こうした課題は個々の教員の技術指導力の向上のみでは解決できない。以上を踏まえ、本報告ではベル・フックスのフェミニスト・ペダゴジーを理論的手がかりとして、体育における「学びの共同体」について考えたい。

AI 時代における「好き嫌い」と体育嫌いの問題化

原 祐一（岡山大学）

AI は、急速に私たちの生活環境や思考を変えてしまった。私たちの生活はアルゴリズムによって個別化され、AI によって「好きなもの」にしか触れない環境が整えられている。そこでは、不快さや不得意さを回避し、自分に適合した経験を選択することが容易になる。しかし教育は、本来、既存の好みを肯定するだけでなく、他者や未知の世界との出会いを通して、自己の関心や価値を揺さぶり、更新していく社会化の営みでもある。本報告では、このような AI 時代の「好き嫌い」をめぐる環境変化を見据えつつ、教師がこの問題をどのように向き合うのかという切り口から捉える。具体的には、中学校保健体育教師を目指す大学生に「体育嫌いがなぜ生まれるのか」を Why ツリーとして整理させ、さらに「体育嫌いが存在する状況でいかに保健体育の授業をするのか」を How ツリーとして構想させた内容を取り上げる。その過程から、体育嫌いという語が、授業経験、教師との関係、身体能力の序列化、評価制度、ジェンダー規範など複数の社会的課題を一つのラベルへと回収してしまう危うさが浮かび上がる。本報告では、体育嫌いをなくすことを自明の目標とするのではなく、改めて多様な他者が身体を使ってゲームをプレイすることの意味を考える。